

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

大阪大学 人間科学・外国語・法・経済学部

前期日程

科目

国語(現代文)

総括

出題数	現代文	2題	古文	1題
難易度(昨年比)	難化	昨年並		易化
分量(昨年比)	増加	昨年並		減少

〈総論〉

今年度も昨年度同様にⅠもⅡも評論が出題された。Ⅰの文章量は昨年度から約 500 字程度増加した。本文の難度は昨年度並みであった。Ⅱの文章量は昨年度から約 700 字程度増加した。本文の難度は昨年度並みであった。Ⅰ・Ⅱを合わせて記述解答の総字数は、昨年度が 810 字であったのに対して、今年度は 800 字であり、記述量は 10 字減少した。今年度は昨年度と同様に、設問は比較的標準的なものが多かったが、制限時間に対して記述量がかなり多く、十分に考えながら解答するのは困難であったと思われる。

Ⅰ 科学的探究におけるアブダクションの役割について論じた文章である。文章量は昨年度の約 4100 字から約 4600 字となった。記述の総字数は、昨年度は 400 字であったが、今年度は 360 字となり 40 字減少した。昨年度は出題されていなかった空欄にあてはまる単語を本文中から抜き出す問題が出題された。設問の難易度は昨年並みである。

Ⅱ 自然について人間と二項対立的なものではなく、人間によって構成されるものであるということについて論じた文章である。文章量は昨年度の約 3300 字から約 4000 字となった。記述の総字数は 440 字であり、410 字であった昨年度より 30 字増加した。設問自体の難易度は昨年並みである。

〈合格への学習対策〉

Ⅰ・Ⅱともに評論、あるいは随筆的評論の出題が定着している。過去問を解くときには、本文全体の構成と部分の論の双方をおさえながら、正確に論旨を把握する読解を徹底したい。記述対策としては、Ⅰ・Ⅱともに 150 字～200 字程度の要旨要約タイプの出題が出題されることが多いので、4000 字前後の評論の要旨を 150 字～200 字で要約する練習を積み重ねよう。100 字程度の標準的な設問では、解答内容を絞り込み、的確な構文で書けるようにしたい。

問題分析(本文)

問題番号	類別(ジャンル)	出典(著者)	コメント(特徴・出題頻度など)	本文のレベル
Ⅰ	評論	『論理的思考とは何か』(渡邊雅子)	演繹、帰納とともに第三の推論とされるアブダクションについて、演繹や帰納との相違点を述べたうえで、それが果たす役割について論じた文章である。	標準
Ⅱ	評論	『誰が場所をつくるのかーポストニューマニズム的試論』(森正人)	自然と人間は二項対立的に捉えられるものではなく、人間が影響を及ぼすことで自然という場所を作っていることを述べた上で、人間によって構成された「第二の自然」と「第三の自然」について論じた文章である。	標準

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

設問分析

問題 番号	設問 番号	設問 形式	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問の レベル
Ⅰ	問一	記述	空所補充。アは「仮説を解明し、証明できる形にする」を、イは「結論がどれだけ経験と一致するかを確かめる」を、それぞれヒントに考える。	易
	問二	記述	理由説明。傍線部の次の文が傍線部に対する例証となっているので、それを軸に解答を作成する。	標準
	問三	記述	理由説明。アブダクションの欠点を説明したうえで、それでもアブダクションが科学的探究に用いられる理由を傍線部以降の内容を中心にまとめる。	標準
	問四	記述	内容説明。1段落にある「科学理論や法則の発見のもとになる仮説の形成段階」がヒントになる。単語一語という設問条件を踏まえ「理論」「法則」を解答例とした。	標準
	問五	記述	理由説明。「なぜ」に対する説明においては新たに仮説を考え出す必要があるが、演繹・帰納は新たなものを生み出さないという点を中心に解答を作成する。	標準
Ⅱ	問一	記述	漢字の書き取り。すべて常用漢字である。	標準
	問二	記述	内容説明。自然に人間の生活や文化が存在しないということは、両者を対立的に捉えていることである。	標準
	問三	記述	内容説明。自然の写真撮影の具体例を用いつつ、傍線部の説明へとつなげて解答を作成する。	標準
	問四	記述	内容説明。傍線部のある段落を中心に両者の共通点を説明し、「第二の自然」および「第三の自然」の定義を中心に両者の相違点を説明する。	標準

「本文のレベル」と「設問のレベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

大阪大学 人間科学・外国語・法・経済学部

前期日程

科目

国語(古文)

総括

出題数	現代文 2 題 古文 1 題		
難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

江戸時代の随筆。字数は1210字程度で、昨年度の1470字よりやや減。昨年度に続き文中に和歌がなく、和歌の設問もなかった。二年連続で和歌の設問がないのは非常にめずらしい。

〈合格への学習対策〉

語彙・文法などに留意しつつ、人物や指示内容の補いを意識し、正確に読解する訓練を積んでおくことが必要。ある程度の長い文章でも試験時間内に処理できるようにトレーニングしておいてもらいたい。また今後、和歌に関する問題も復活する可能性があるため、和歌に関する対策も必要。修辞法はもちろんのこと、詠み手の心情や行動、詠まれた状況までも読み取れるように訓練すること。

問題分析(本文)

問題番号	類別(ジャンル)	出典(著者)	コメント(特徴・出題頻度など)	本文のレベル
Ⅲ	随筆	『年々随筆』 いしはらまさあきら 石原正明	2年連続で江戸時代の随筆からの出題	やや難

設問分析

問題番号	設問番号	設問形式	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問のレベル
Ⅲ	問一	記述	現代語訳3問。(a)の「～むにも」・「はかなくて」は訳しにくい。	標準
	問二	記述	理由説明。素材箇所のとめ方が難しい。	やや難
	問三	記述	内容説明。素材箇所の内容理解が難しい。	難
	問四	記述	内容説明2問。(ア)は傍線部を含む段落を、(イ)は傍線部の次の段落を整理してまとめる。	標準

「本文のレベル」と「設問のレベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。